

タイトル	基調講演 食と農の人文学 - 人間を深く考えるための人間中心主義批判 -
著者	藤原, 辰史; FUJIHARA, Tatsushi
引用	年報新人文科学(20): 124-149
発行日	2023-12-25



□基調講演

食と農の人文学

—人間を深く考えるための人間中心主義批判—

京都大学人文科学研究所 准教授 **藤原 辰史 氏**

【プロフィール】

藤原辰史 (FUJIHARA Tatsushi)

1976 年、北海道旭川市生まれ、島根県横田町（現奥出雲町）出身。1995 年、島根県立横田高校卒業。1999 年、京都大学総合人間学部卒業。2002 年、京都大学大学院人間・環境学研究科中退。京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、現在に至る。博士（人間・環境学）。2019 年 2 月第 15 回日本学術振興会賞受賞。

著書として、農業史では『ナチスドイツの有機農業』『ナチスのキッチン』『稲の大東亜共栄圏』『トラクターの世界史』『戦争と農業』『農の原理の史的研究』、食に関しては『食べること、考えること』『給食の歴史』『食べるとはどういうことか』『分解の哲学』などがある。『分解の哲学』でサントリー学芸賞を受賞。ナチスの研究に対し、日本学術振興会賞を受賞。

1 食と農から人間をとらえ直す

今日は、私が研究してきた歴史研究の蓄積ではなく、この歴史学と言われるものはどのような形でチャレンジしていくべきか、未来はどのように語られるべきかをお話したいと思います。

私は「食と農から人間をとらえ直す」ことが歴史学の発展に必要なと考えています。まず現在起こっていることからお話しします。1950年代以降の人口爆発をグラフで見ますと、私たちはとんでもない例外状態で生きていることがわかります。崖っぷちを這い上がるくらいの角度で人口が増えている中で、私たちは何を見直さなければいけないのかと考えたときに、一つは農業技術があるのではないかと思います。トラクターとそれにもなう圃場整備やハーバー・ボッシュ法（空気中の窒素をアンモニアに変える技術）、合成農薬、品種改良、大規模単作農業、そして大規模畜産といった、さまざまな農業技術が展開することによって人口は保たれています。

一方で、このような農業技術がもたらした負の農業遺産が、国際的な土壌劣化、そして水質汚染です。劣化とは土壌中の養分、水分が失われて砂に近くなっている現象です。2015年に国連が国際土壌年を掲げた時に、地球上の1/3の土壌が劣化しておりこのままでは食糧危機が訪れるので、土壌を守っていくために大規模単作ではなく家族経営のような小さな農業経営を中心に進めていかないと回復は見込めないというアピールがなされました。そのくらい切羽詰まった状態であることを考えていただきたいと思います。次に水質汚染ですが、最近ではマイクロプラスチックとプラスチックによる海洋汚染が

進んでいます。学生に話をするとき、私たちの土台である「月火水木金土日」の7つの要素のどれが私たちの暮らしにとって危機にあるかを考えてほしいと言っています。とりわけ農業から考えると、「土」と「水」が非常に危険な状態にあります。未来はまずそこから考えなければなりません。

しかし、今、若い人たちが特に興味を持っているのは、別の方向の「食と農の未来」です。たとえば、別冊日経サイエンスの『食の未来』号（2017年10月発行）では、環境汚染の果てにどのような食と農の未来が考えられているのかが、技術者と投資家の側から描かれています。一番有名なのは培養肉の技術だと思っています。今回の大きなテーマである人文学のフロンティアとして、目の前にあるのがこの培養肉問題と私は信じてやまないのです。地球温暖化の原因の一つとして、牛のげっぶに含まれている成分が二酸化炭素の6倍の温暖化効果を持つっており、牛をたくさん飼育していると土壌が荒れたり生水を使い過ぎたりするとして大きな問題になっています。牛肉を食べ過ぎていることが地球環境を破壊しているのであれば、牛を殺すのは止めようということで、ご存知のように先日培養肉の技術が『朝日新聞』でも取り上げられました。牛の屠殺を全世界で禁止し、その代わり肉の一部、筋肉の一部の組織を取り出して培養し、それを私たちが食べれば永遠に牛を殺さなくてもいいという技術です。今ではミートボール一個ができるところまで来ている。これだと地球温暖化も防げるし、いろいろな意味で未来が語れるので、著名人たちがお金を投じて、子どもたちの未来を守るために培養肉が作られています。

人文学は基本的にバランスをとる学問ではなく、立場を明確に伝えて議論をするものだと思っていますので、あらかじめ私の立場を申し上げておきますと、私は培養肉の普及には反対です。なぜかというと、私たちの食べる行為はもっと深く哲学的な問いに耐えうるものであって、命を奪わない食べ物が出

てくるのは、人間概念を根本から変えてしまうからです。例えばそういう話を東京の理工系の学部で話すと、「培養肉は私たちの未来の地球環境を救うのだから、賛成である」という感想が7割以上を占めます。若い人たちは、私のような上の世代が残してきた地球の破壊の遺産に対して深刻に考えていると言えますし、一方で食べ物への概念が変わってきているとも言えます。それでも人文科学のフロンティアとして問うべきなのは、物質循環つまり生と死のサイクルから切り離された食べ物、人類を10億人救ったとしても、それは本当に食べ物であると言えるのか。それは地球の救いといえるのか。容易に答えの出ない問いが存在すると思います。

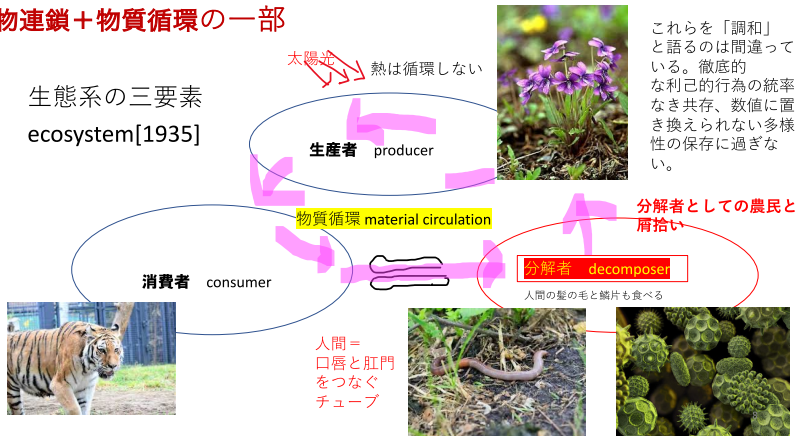
もう一つ、未来を想像するうえでは、SFが大変役立ちます。『ねじまき少女』という私の好きなSF小説は、日本語訳も出ていて、映画化もされています。この物語は、地球環境問題が深刻化した結果、海面の水位が上がり、防波堤を築いてその中で暮らしていくしかなかったタイが舞台です。この世界では、石油が枯渇したためゾウの遺伝子を組み換えてゼンマイを巻かせ、その回転力によってパソコンから電車まで全部動かしています。従来のゾウを遺伝子組み換えし、遺伝子組み換え飼料を食べさせて、強力なパワーを得させてグルグルと回転させてねじまきの力に還元しています。地球上の遺伝子の情報のすべてを握っている企業が地球で非常に大きな力を持っていて、唯一自国の資源を守っていたタイについてやってきた。さてどうする、という物語です。

このように地球環境問題は、かなり昔からサイエンス・フィクションとして私たちに将来像を突き付けていました。人文科学は、自然科学と比べるとどうしても曖昧とか、エビデンスがないと言われがちですが、そのように攻撃されるたびに思うのは、「しかし、人文科学には強烈な武器がある。それは想像力で

ある」。想像力―妄想力と言ってもいいかもしれませんが、それだけがわたしのとりえだと思っています。私は大好きなSFを読みながら、自分の想像力を鍛えることにしています。

このような未来が語られる中で、私たちはもう一度足元を見なければいけないと思います、このような図を作りました。これは、私の著書『分解の哲学』で論じたものです。人文学は国語や社会の学問だと思われると思いますが、私は人文学者こそもっと、生物学を学ぶべきだと思います。生態学では、生産者・消費者・分解者と呼ばれる三つの生き物の集団があります。生産者は太陽光を使ってブドウ糖が生産できる唯一の生き物、つまり植物です。消費者は生産者を食べる、あるいは生産者を食べた動物を食べることしか生きていけないもの。そして分解者は、生産者と消費者の死骸や、それが落としたもの、葉っぱなどを食べて次の分解者に渡し、さらにそれを食べて分解し最終的に植物の栄養要素へと還元しています。

A 地球の通り道としての人間 食物連鎖+物質循環の一部



「環境」という言葉への違和感

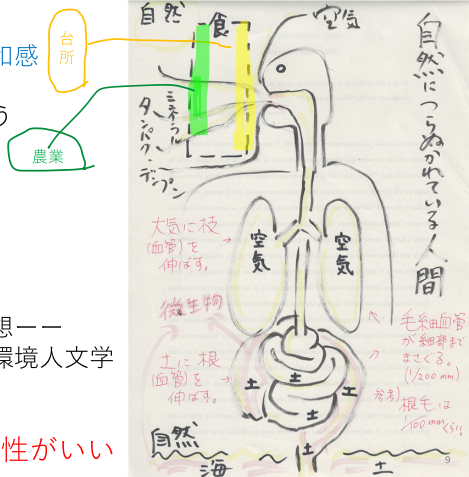
環（私たちのまわり）という
意味だけでいいのか？

自然につらぬかれている
微生物にたかられている

参考

藤原辰史「「たかり」の思想——
食と性の分解論」『思想 環境人文学
』岩波書店、2022年11月号。

→人文学と自然科学は相性がいい



くものことを指しています。

私は自然や地球環境問題、食と農を、さらには新しい人文学を考えるうえで、この分解の役割をもっとしっかり考え直す必要があると思っています。私たちになじんだ農業という産業が、土壌を保全して栄養を与えながら管理し、土壌の中の無数の分解者たちを助けていくなら、実は生産者ではなく分解者の友達なのではないか、と思っています。

この図で、人間をもう一度考え直せるのではないかと、違ったものに見えるのではないかと考えています。私たちは環境問題という言葉をやや安易に使っています。ドイツ語では環境を *Umwelt* と言います。Um はぐるり、Welt は英語の *world*、つまり世界という意味です。まとめると、「ぐるりの世界」になりますね。英語も同じですが、環境とは本当に私たちの「ぐるり」の問題なのだろうか。私たちは受精卵ができて、それが分裂していく途中で、おしりから口に向かって穴が開き、ちくわ状になってから人間になったと考えれば、私たちの口から肛門までは

一本のチューブであつて、その内側は「外」ではないか。私たちの中にある「外」には水も食べ物も空気が通つていて、私たちが「環境」と呼んでいるものに連ねられているのではないか。私たちの内なる外、内臓の中には膨大な数の微生物が住んでいて、私たちの食べ物のおこぼれを食べているだけではなく、免疫ともあるいは脳とも連関している。今、腸脳連携も医学で研究されていますが、このように総合的な学史から私たち自身が既に自然の一部であると言えらると思います。

このように食べ物から人間を捉え直していくと、私たちは食べ物に貫かれている。地球の素材でできている食べ物をすべて口から肛門に向けて貫き通している存在と言えます。そしてもう一つ、食べるのとが面白いのは自然科学のジャンルと社会の問題を同時に考えられるところです。

そもそも人間は他の霊長類とは違つて、セックスを公開しません。代わりに食べることを公開します。ずいぶん前に山極寿一さんに教えていただいたのですが、ゴリラはその逆で、性行為はオープンにやりますが食べることは隠します。なぜ人間だけがそれ選んだのか。マンモスやシャチなどと比べると人間は小さくひ弱です。協力しないとご飯が食べられない。しかも脳は非常に食欲な臓器で、火で食べ物に化学反応を起こさせないと脳が欲する良質な栄養が取れません。力は常に食べ物と深く関わる存在だと人類学者のリチャード・ランガムは言っています。そういう意味で、まさに食べ物で他者とながつてゐる。そして私たちがご先祖様に食べ物を捧げるように、食べることで死者は常に結びついている。死者と共に生きる証として食べ物が存在することを忘れてはならないと思います。

しかし、現代社会の地球環境が破壊されていると同時に、社会関係も破壊されています。それは日本

では無縁社会という言葉で表現されます。日本はOECD諸国の中で断トツに「相談する相手がいない」と答えた若者が多い国です。無縁社会、無希望社会といわれる孤立的な超個人主義的な社会が到来して、社会関係をもう一度、どのようにつなぎ合わせるかという課題に直面しています。

本日掲げられた題目の「人文学のフロンティア」は、一方で社会的な問題、もう一方で地球環境的な問題、同時に一石二鳥で考えられることだと思っています。縁食論とは私が名付けたものですが、要するに食べるのがダメだから社会がダメになっていると仮説を立てると、食に関わる事柄、例えばフードロス、抗生物質が家畜に多量に使われることによる環境汚染、化学肥料の流入による海の富栄養化という海水汚染、容器包装プラスチックを大量に燃やし捨てていることなど、食べ物が多くの問題につながっているのであれば、食べ物の歴史をきちんと暴くことが必要ではないだろうか。食べ物を通じてどのように人々の圧倒的な力が働いて、飢餓や社会・自然の破壊が起こって来たかを考えなければならぬと思います。

そもそも私たちの暮らしそのものが、基本的には農業や食の問題と深く関わっています。一つ例を挙げますと、なぜ古代文明は、生産量が高いイモではなく穀物の生産を進めたのか。それに対して人類学者のジェームス・C・スコットは、『反穀物の人類史』（みすず書房）のなかで、税金を集めやすくするためだと言っています。イモや大豆なら隠したり、こっそり作ったりしやすい。例えば、かつての日本の稲作地帯では、水田の畔に大豆を植えて（その根に共生する根粒菌が田んぼに窒素肥料を供給する機能だけでなく）それを味噌や醤油にしましたが、穀物ならそのようにイレギュラーな形で作ることはいけません。税金を取りやすくして、人民を管理しやすいように選んだという説を立てています。

このように、昔から私たちが食を通じて管理されることがたいへん多く、私たちを決めている面がある。それを食権力と呼んでいます。食権力は常に長期的、かつ遅効的に私たちに働きかけてきています。遅効は土壌肥料学、あるいは医療の用語で、その反対用語は即効です。即効とはすぐに効く。一方、日頃から腸内細菌を育てるためにヨーグルトを食べるように、ゆっくり後から効いてくることを遅効性と言います。社会現象を知るうえで、この遅効性について考えなければなりません。私たちは歴史を振り返るときに大きな事件ばかりを見てしまうけれども、ゆっくりと私たちの心と体を攻撃する、スローディザスターに注目しなければならないと思っています。私たちは、旅客機がビルに突っ込んだ、大きな爆弾が投下されたというような印象的な暴力の歴史は頭の中に記憶しやすいのですが、それに加えてドメスティックバイオレンスのような、人知れずゆっくりと、でもじわじわと確実に蝕んでいく暴力を見なくてはいけない。そのとき、私は食が非常にびつたりくる研究テーマだと思っています。

2 食権力とその歴史

検討課題1 農業技術と軍事技術のデュアルユース

第一次世界大戦で初めて使われた武器の一つに、毒ガスがあります。終戦後、余った在庫をアメリカの昆虫学者が「人間を殺せるなら昆虫も殺せるだろう」と、綿花畑の害虫を殺すために飛行機で撒いて

みたら、それが効果てきめんだった。つまり毒ガスと農薬は、同じ技術としてこの世界に登場しました。毒ガスには3種あって、一つは塩素ガスを使った窒息剤です。これはガスが肺の中に水をためていくもので、ノーベル化学賞をとった人物が、ドイツの最先端の化学者ブリッツ・ハーバーと共に開発しました。次にガスマスクが登場したので、衣服の間から入り込んで皮膚を火傷させるびらん剤を作ります。これはマスタードの香りがするので、マスタードガスと呼ばれています。そしてもう一つが青酸ガスで、第二次世界大戦後に余った毒ガスを使って生成されました。ドイツでも、余った毒ガスで科学者たちが会社を興し、公共施設の消毒企業として大繁盛しました。そのときのヒット商品がツイクロンB^ベです。アウシュヴィッツ強制収容所でナチによって使われたユダヤ人殺害のガスが、穀物倉庫で昆虫をやっつけるガスになりました。

私たちは平時に生きていますが、戦争中の技術によって生かされていることがここから見えてきます。そして人を生かす技術と人を殺す技術が密接につながった世界を生きることがわかります。それが一番わかりやすいのがヴェトナム戦争です。2023年8月にヴェトナムを縦断し、ヴェトナム戦争の痕跡をたどったり聞き取りをしたりしてきました。そこで明らかになったのは、いわゆる枯葉剤として1960年代末から70年代にヴェトナムに撒かれたものは農薬、除草剤に過ぎないということです。この除草剤を撒くことでアメリカ軍がやりたかったのは、一つはマングローブ林を枯らしてゲリラをあぶり出すこと、もう一つは作物を枯らせて飢餓にむかわせ、生産力を一気になくすことです。この枯葉剤によってご存知のように多くの人々が、胎児性も含めてですが、ずっと心身を蝕まれることになります。当時マングローブ林でゲリラをしていた人が隠れていた場所は、現在は緑であふれていますが、かつ

て緑はゼロでした。枯葉剤を撒いて緑がほとんどなかったのが、日本も含めて全世界からお金が集まって、今ようやくマングローブの林が復活しました。マングローブは海水が満ちたり引いたりする場所に生えています。容易に想像できると思いますが、このような場所は食料が豊かです。インタビュで「ここは米以外なんでも採れる。カニがおいしかった、魚がおいしかった、そういうものを食べながら必死に米軍と戦っていた」という話を聞きました。食料が豊富の中で、唯一米だけは中国からこっそり運ばれてきました。ここに枯葉剤が撒かれたのです。

ヴェトナム戦争のゲリラを生きた人々の話を聞くと、一番怖かったのは米軍ではなかったと言う人が数人いて驚きました。例えば、トンネルの中で暮らしながらゲリラ戦を戦っていた人たちは、酸欠が一番恐かったと言っていました。地下ですつと暮らしているので、アリ塚を模した空気穴をいくつか作っているのですが、ここがふさがれてしまったら、酸欠で10分と持たない。水がなくな



ちなみに、枯葉剤被害の**マングローブ**は、食の宝庫。魚やカニや貝が豊富。解放戦線兵士の貴重な食物。一方で、蜂、ワニ、毒蛇の被害も。

2023.8.24 発表者撮影



でも食べ物がなくともなんとか生きてはいけるけれど、空気だけは大変だったと話をしていました。マングローブ林のゲリラの基地では、現地の若い軍人から、毒の蜂やワニが恐かった。特にワニは本当に恐かったらしいという話を聞きました。

このような毒ガスと枯葉剤の事例はヴェトナムだけではなくありません。遺伝子組み換えで非常に力を持ったモンサントという企業、今はバイエルという会社を買収されていますが、この企業を中心に作られたものでした。枯葉剤は火と一緒に混ぜると、猛毒のダイオキシンを発生し人を苦しめます。ヴェトナム戦争の当時、沖縄からたくさん兵隊や枯葉剤を積んだ飛行機が飛び立っています。この枯葉剤をタンクに詰めておいた基地が2013年に掘り起こされ、ダウケミカルという現存する化学企業の名前を記したドラム缶が出てきて、そこにたくさん枯葉剤があつた、という事例に見られるように、ヴェトナムだけでなく非常にグローバルな問題として私たちを苦しめる、スローデイズスターとして存在していることがわかります。

農薬の問題は、三重県の有名な四日市ぜんそくと呼ばれる公害とも深く関わっています。私たちは教科書で、これを大気汚染の公害だと教えられてきました。非常に多くの人がぜんそくで苦しんで、辛く生きていくのに絶望したり、自死してしまったりするような公害でした。実はこれは、もともとは水質汚染が原因です。四日市に石油化学コンビナートが作られ、そこから石油が漏れ出し、「異臭魚」と呼ばれる魚がたくさん出てきました。工業用水の源にあつたのが、石原産業という農薬の企業でした。四日市公害は有害な煙のイメージがありますが、実はそこに集まった石油化学関連企業の、総合的な水や空気の汚染です。中には中部電力のように電力企業もありましたが、農薬企業が、海洋汚染も含めて原

困になっていたことを私たちは考えなければならぬと思います。以上が、自然科学に基づく農業技術と、それがもたらす人間社会、自然破壊の事例でした。

検討課題2 食品産業による労働力・自然の同時的破壊

ユナイテッド・フルーツ社という、1899年創業のアメリカの有名な企業が、バナナを世界商品にしました。グロス・ミッチェルという黄色いバナナをモノカルチャーとして、世界中に売りました。バナナにはいろいろな種類があつて、緑色や赤色のバナナもあります。しかし、私たちがバナナといったら黄色です。この黄色いバナナを大量生産したのが、このユナイテッド・フルーツ社でした。

バナナは木ではなく草なので、同じ品種を続けて植えていると病原菌が発生し、そうなると一気にバナナ農園が全滅します。そのとき、彼らは火を点けて農園を全部焼き払い、別の熱帯雨林を切り拓いてバナナを植えることを繰り返していました。このように自然を破壊しながら、私たちの大好きなバナナが生産され続けてきています。私も大好きなガルシア・マルケスの小説『百年の孤独』は、コロンビアのバナナ農園が舞台になっています。

もう一つ、1906年に作家アプトン・シンクレアがアメリカのシカゴにある食肉工場ストックヤードへの潜入調査をもとに書かれた小説が、『ザ・ジャングル』です。日本語でも読めますのでぜひ読んでいただきたいです。ここで暴かれたのも、食によつて社会が破壊されているということです。シカゴでは、安い賃金で主にリトアニアの移民を大量に雇つて働かせていました。病気やけがをしたらすぐに首

を切る。ちょっとしたストライキを起こすと、すぐに潰されて首を切られる。そんなとんでもない状況で労働者たちは働かされていました。そうすると働く人のやる気がなくなりますから、生産工程が非常に疎かになる。結局、掃除が行き届かなくなつてネズミが走り回り、その糞や死骸と一緒にミンチ肉の中に入っていることを書いてしまった。この本を読んで、そんな肉を食べさせられていることに怒った人がいました。当時の大統領セオドア・ルーズベルトです。そうして食品衛生法を作りましたが、労働者を守る法律は作られませんでした。食品産業では、低賃金労働者が使われており、そのような状態がずっと続いていました。

2001年、アプトン・シンクレアの再来といわれるエリック・シュローサーが『ファストフード・ネイション』を書きました。日本語では『ファストフードは世界を食いつくす』というタイトルで出版されています。この本では、シュローサーが普段食べている「ハンバーガーのパテはどこから来たのか」と疑問を持ち、それを探る旅をします。行き着いたパテの食肉工場では、ものすごいスピードでラインが動き、人々がラインを止めないようにリスクを冒して肉を切っていく。ちょっとしたでも止められると機械に手が入り込んで、けがしてしまうことが日常茶飯事でした。ここでもやはり労働者が低賃金で働かされ、ケガをしてもすぐに現場に連れ戻されて血を滴らせながら働いていたのです。

このように、100年経つても変わらぬ食肉工場の現状に、コロナ禍のとき問題になったアメリカとドイツの食肉工場で起こった集団感染を思い出す人もいるでしょう。特にドイツは酷かったです。ルーマニアやブルガリアからの安い労働賃金の移動労民を雇って、宿舎にぎゅうぎゅうに詰めて働かせていたので集団感染が一気に広がりました。このように、私たちがおいしく安く楽しく食べているものの背景

に、いつも暴力や支配の香りを感じ取らなくてはならない、というのが私が申し上げたいことです。

検討課題3 国家による食の暴力

もちろん、それは企業だけではありません。国家も常に強い暴力装置として働いてきました。第一次世界大戦中、ドイツは世界2位の経済大国でしたが、イギリスによる海上封鎖と、食糧自給を怠っていたために、戦争が始まって一気に生産量や食糧輸入が落ちて飢餓をもたらしました。といっても食料自給率8割はあったのですが、それでも飢餓に陥り、76万人の餓死者が出たという悲劇がありました（とくに1916年から17年にかけての冬は、民衆が飼料用カブを食べて飢えを凌いだので「カブラの冬」と呼ばれていました）。悲劇の中で人々は、食べ物为民衆に食べさせない政治は政治ではない。それがたとえホーエンツォレルン家という由緒ある王朝であっても倒さなくてはならない、と女性や兵士たちが立ち上がって1918年11月にドイツ革命を起こしました。これは教科書にも載っている出来事です。が、その背景にも食べ物があったのです。

1929年になると、再びドイツは飢えの恐怖に苛まれます。この年の秋に世界恐慌が起こり、人々が路上で亡くなったり、物乞いをしたりすることが増えました。このときに飢えの恐怖感を使って、非常に効果的に人々の支持を得たのがナチスです。ナチスは飢えと対抗するならヒトラーを選べと言って選挙を闘い、見事勝利を収めます。その後、ナチスは農民こそがこの国の中心である、食料を管理することが女性の仕事であると、食と農の政策を打っています。詳しくは私の著書『ナチス・ドイツの有機

農業』で書きましたが、そのようにナチスはドイツ人に関しては、第二次世界大戦の終了年までほぼ飢えさせることなく戦争を（負けたとはいえ）戦い抜くことができました。

ただ、そこにはもう一つからくりがありました。これが今、ナチス研究者の非常に熱いテーマになっている「飢餓計画Ⅱフンガープラン」と呼ばれているものです。これは、ナチスが二度とドイツを飢えさせないために考えた、ドイツ人以外を飢えさせる方法です。高級なアーリア人と違って、ウクライナ人やチェコ人といったスラブ人、ユダヤ人の胃袋は伸縮自在で野蛮なので食べ物は少なくてもいい、と占領した地域や捕虜に対して食料を一気に減らしました。「価値のない人種」は飢えて死んでいつてもらうとナチスの公式の文書に書かれてあります。これはアウシュヴィツと並び称されるくらい酷い政策だと思いますが、人種に応じて食べ物の分配を決めるだけではなく、障害を持っている人たちも「生きるに値しない生」として、特に子どもに対して安楽死計画をしていたのはご存じのとおりです。安楽死は抹殺もありますが、有名なのは飢餓による殺戮。食べさせないで殺すというとてもない方法を編み出してナチスがドイツ人を守ったことは、大きな問題だったと思います。

3 現代の食権力

次に現代の問題へと向き合っていきたいと思います。もう一度企業の話に戻りますが、ポール・ロバー

ツというジャーナリストの著書『食の終焉』によると、アメリカで340グラム入りのシリアルの商品価格は266円ですが、原材料となる穀物の値段は約19円です。スーパーマーケットの取り分約20%を引いたとして、残り36%は生産と梱包にかかります。シリアル企業は、それにさらに44%上乗せして買わせているわけです。つまり、私たちは広告代を食べているようなものです。広告代がどうして必要なのかというと、茶色のシリアルをそのまま売っても人々は欲望がかき立てられない。有名なキャラクターなどを描いたきれいな四角い箱の中に入った方が買いやすい。このように広告に多大なお金をかけて、私たちは貴重な給与をそこにすぎ込んでいます。

加えて、食品そのものの見た目にもお金を払っています。お米を生産している方はご存知と思いますが、1000粒に一つ黒い色が入ることがあります。これはカメムシがお米を吸うとそこだけ黒くなるのですが、消費者は1000粒の中に一粒黒いのが入ると買わない、と売る側は勝手に思っています。ですから、全部白くするためにカメムシを駆除する農薬をわざわざ撒いています。一部の有機農家を除いて、ほとんどの農場で撒いている。そのために、農薬散布が一回分増えてしまっています。また、『朝日新聞』の記事で読んだのですが、大阪市の中央卸売市場の野菜卸売業者によれば、「結局野菜は見た目が9割」だそうです。味が良くても見た目が悪かったらほとんど売れない。その消費者のレベルに溜息がついています。食べ物どこにお金が使われているかは、私たちの日頃の消費行動と深く関わっています、それによって非常に多くの農薬や広告費が常にかけてられています。

このようなあり方のマーケティングは、どうやって生まれてしまったのか。スウェーデンのジャーナリストであるカトリーン・マルサルが書いた『アダム・スミスの夕食を作ったのは誰か?』は、世界的

ベストセラーになりました。これは、「経済学をフェミニズムの観点から考え直さなくてはならない」という内容です。近代経済学はアダム・スミスから始まって、『国富論』や『道徳感情論』など非常に優れた本を書いており、私も多くを学びましたが、経済学の父である彼が一体誰にご飯を作ってもらっていたのかを暴く本が売れたのです。

アダム・スミスは経済人（ホモ・エコノミクス）という一つのモデルを設定して、経済人は常に合理的に、自分の利益を最大化するために行動するとし、それを計算すると自然に経済学の原理が見えてくると説いていました。マルサルは、アダム・スミスの偉大さは認めつつも、経済学がモデルにしている経済人とは誰なのかを考えないといけないと言っています。彼の本では、経済人のバイオリズムはほとんど無視されている。例えば女性は月に1回生理と向き合わなくてはいけない、とは書いていないわけです。常に男性的な問題として書かれ、男性モデルとしての経済が常に回っていると指摘しています。

そして、アダム・スミスの夕食を作っていた人を探っていくと、お母さんだとわかりました。生涯独身だったアダム・スミスは、ほとんどの身の回りの世話を母親にやつてもらっていた。スミスは「肉屋や酒屋やパン屋はその善意ではなく、自分の利益を考えるから仕事をしている」と書いているけれど、それではあなたの母親は自分の利益を得るために息子にずっと食事を作っていたのか？とマルサルは喧嘩を売ったわけです。そうじゃない。人間にはもともと、簡単に説明できない感情が渦巻いているだろう。この感情とはなにか。私の研究の問いはここにあります。そういった感情を捉えながらこの世界を描かないと、地球環境や無縁社会の問題は考えられないのではないか。経済学自体のフェミニズム的な根本的变化が今求められているのではないかと言っています。

私たちの食べ物、自分たちの力の及ばないところにあり、私たちと非常に深く関わっている大きな力によって買わされていたり、いつの間にか広告代をたくさん払っていたり、あるいは知らない間に人体に危険な農薬を購入させていたりすることを申し上げました。国も、国民を飢えさせないためならば他の人種を飢えさせることもする存在であることも見えてきました。ご存じのとおり日本軍もまた、陸軍の死者の半分を餓死させています。自国の兵隊を戦闘ではなくて、食べ物が行き渡らなかつたというただそれだけで失いました。

4 空間を作り直す（縁食論実践編）

このように食権力が張り巡らされている社会のなかで、どうすればそれとは異なる関係を取り結ぶことができるのか。ここからは、違った視点から話をしていきます。過去から続いている食権力の在り方が、食べ物を通じて人々とつながる力、人間と深くつながる在り方を分断してきました。その中で、もう一度それを取り戻そうと動いている人たちがいます。私は著書『給食の歴史』や『縁食論』など、学校や保育園の給食を作っている人たちに向けて文章を書いたことで、そのような方たちから呼ばれてお話をする機会がとても多いです。特に最近は保育園からの依頼が増えました。なぜなら、食べ物は教育とか保育の中心にあつて、それが歪んでいると、教育とか保育全体が歪んでしまう。だからこそ給食の

担い手だけでなく多くの人が食に関心があるわけです。子ども食堂、大人食堂を経営する人からたくさん、お声掛けやお手紙もいただいているので、その方たちから聞いたことを紹介します。

先ほど無縁社会と言いましたが、そもそも社会の作り方、都市計画自体が非人道的であることはご存じのとおりで、排除アートとも言われています。このちよつとカッコ良さそうな、人を寝かせないためのチューブ状のベンチ。真ん中に手すりがあつてゴロンと寝かせないベンチも排除アートです。私はドイツによく行きますが、ドイツでは基本的に誰もがベンチで寝転がつていいし、ホームレスや子ども、あるいはバックパッカーが自由に使える平たい場所は、至る所にあります。日本の人たちは、ホームレスがいるとイメージが悪くなると言つて非人道的なアートをたくさん作つています。

人がふらつと立ち寄れる都市、あるいは建物の建設・計画・設計が重要だと思うのですが、そのために食べ物を通じて人々はどうのような場所を作つてきたかを説明します。私は「縁食」という造語を使つて説明してきました。家族とか宗教団体などの共同体の食や、あるいは強制された独りぼっちの孤食でもなく、ゆるやかに人々が集まつて食べるあり方のことを「縁食」と呼んでいます。島根県の山奥では、午後3時頃に「タバコ」と呼ばれていた休憩時間がありました。この時間になると縁側に長靴を履いたまま座つて、果物を食べたり、飲み物を飲んだりするのですが、縁側とは不思議な空間で、そうやっていと近所のおじさんやおばさんが、なんやかんやと言ひ訳を付けてやつて来る。いつの間にか、おいでおいでと言つて縁側でちよつとお茶を飲んで帰つていく場所・時間になつてゐる。縁側の縁の字は、まさにそのような字で、家庭の外と内のちよつど間にある不思議な空間です。葬式の時にはお棺を縁側に運んで、そこから外に出しました。生者と死者の空間の間が縁側でした。この縁側の「縁」を利用し

ながら考えた言葉です。

そしてもう一つ、今の社会が強目的性を持っていて「なんとなくこうしていたらいいな」「なんとなくこうだったらしいな」という弱い目的で集まりにくくなっていると考えたことから、弱い目的が自然に併存できる場所として「縁食」空間という言葉を使っています。そこでは、問題がすぐに解決するわけではないけれども、例えば求人広告だったり、あるいは援助を受け取るための手段が相談できたりして、あとから効いてくる遅効的な効果も現れるものとして考えたわけです。

「縁食」を表現していると思われるのが、日本一おいしい給食と自他ともに認める京都府の伊根町の給食です。一見なんでもない給食ですが、近くの漁港で捕れたイワシを使ったお出汁の卵とじスープや、朝捕れたてのサワラの味噌焼き、調理師さんの家の畑で朝採ったサツマイモをさいころ切りして素揚げにし、塩を振ってご飯に混ぜたものでした。サツマイモの蔓の佃煮もごはんに混ぜてあって、味わい深いものでした。これらはすべて親戚、



日本一美味しい給食
京都府伊根町



40

親、そして周りの人々によって作られた野菜でできています。しかしこれが可能なのは、この小学校に全校生徒が20人から30人くらいしかいないからです。そしてこの給食を作るために、一人の栄養士の女性が漁港と農家を駆け回り、常にこれだけ毎回用意してくれるよう頼み、みずからも子どもたちが健やかに、楽しく食べられるレシピを研究されました。こうした人とのつながりの中で作られた給食です。これは、まさに、食品関連の大企業によって形成された巨大な流通システムから離れているからこそ、日本でも稀にみるほどのおいしい給食が誕生しているのです。

また、大阪の「ばんざい東あわじ」というおばんざい屋さんでは、おばんざいを1g 1円で販売していて、500gを超えた分は無料。大阪のおばちゃんたちは当然、1kgくらい買って帰りますが、加えて子どももこの場所にやって来ます。余ったおばんざいが無料冷蔵庫に入っていて、各自持ち帰ることができます。それからお手伝いをする無料になりますから、学校給食がない夏休みは

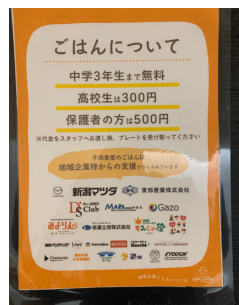
子どもたちがここにきてお手伝いする。無料だから人々がやって来て集う場所、縁食空間を作っています。

つい先週行ってきた新潟の事例では、こども食堂を作るためにわざわざ居酒屋を作りました。一つの調理空間で居酒屋の料理と共に子どもたちに食べさせるものを作っています。農家からも市場に出回らない食材が提供されます。さらに高校生ボランティアを募って、ご飯を無料で提供しています。

他にも、各地でさまざまな調査や聞き取りをしています。フードバンクとは企業から不要になった食べ物をもらって貧困家庭に配る取り組みですが、そうするとどうしても加工食品が多くなる。そこで、フードバンク仙台では、地元の農地を借りてそこで生産したものを渡すことも始めています。

このように食べ物を通じて、さまざまな空間を作り上げる試みは、もちろん単体では、巨大な食権力を崩壊させるほどの力を持ち得ておりません。しかし、それらの小さな試みの積み重ねによってしか、食権力の土台が崩

新潟の地球の子供食堂と宿題Café
子ども食堂を作ると同時に居酒屋
を併設。厨房を使う。高校生や大学生の
ボランティアは無料で食べられる。



←農家の商品
にならない
作物が届く

せないのもたしかです。なぜなら、食権力は、わたしたちのミクロな生活の領域まで浸潤しているからです。

5 芸術の役割―暴く、体験する、囲む

最後に、芸術の話をしてください。食をめぐる暴力や権力のお話をしていると、芸術家からお声掛けをいただくことが増えました。芸術はときに歴史学と同じ働きをします。ベルリンのビエンナーレで、非常に注目されていた forensic architecture の映像作品は、インターネットで見られますので、ぜひご覧いただきたいです。これはイスラエルがパレスチナのガザ地区に枯葉剤のように農薬をまいて枯らし、つまり農業を通じて人を殺している、そういった攻撃を暴いた作品です。今、芸術家は歴史を学び始めています。歴史を学び、どう伝えるかを必死に考えています。そうして、化学物質によって切り離されてしまった人間と人間、人間と自然の関係を直視し、再考する作品ともいえます。

また、音楽家の曾我大穂さんを中心に、いろいろな楽器などを自由に使って即興で音楽を奏でる「仕立て屋のサーカス」というパフォーマンスがあります。光と布を使った非常に美しい空間に人々が集まってくる芸術集団です。ここは18歳以下無料で、自称でも構わないので、どう見ても50歳くらいの方が「18歳です」と言って無料で通ったこともあるそうです。ここは、飲み食いも、寝るのも、子どもが

叫ぶのも自由。撮影することも可能です。演奏に参加するのも自由です。僕はここでゼミをやりました。ゼミや大学の講義をやるのも自由です。サーカスはただ円形であればいいというのが曾我さんの考えです。対面であつたらどうしても緊張しますが、円形だと視線が交差して演者の向こう側の人の目が入ってくる。そうやってご縁をつないでいくような空間なので、サーカスこそ空間に一番近いのではないかというのが、曾我さんの考えていたことでした。

芸術家たちの試みも含め、自然と人間あるいは人間と人間の縁が断ち切られていて、それをもう一度結び合わせる力が求められている。たとえ、それが直接的に食権力を弱めることにはまだつながらないとしても、世界各地で起こっていて、しかも広がっている。その領域こそが人文学のフロンティアの一つではないかと思えます。そのためには、もう一度経済学モデルの以前に戻って、人間存在そのものがどのようなものなのかを自然科学的に、生物的に考える動きが必要です。食べ物が非常

イスラエルの ガザ地区への 農薬散布攻撃

herbicides
2003.9~2015秋

forensic architecture
の映像作品
(2022ベルリンのピエン
ナーレ Still Present !)





に過酷な労働によって、ようやく私たちの手元に届いていることを知っていく。それはやはり即効的な考え方ではなく、遅効的で、ゆっくりとした長期にわたるものの見方をしていかないとけない。それは歴史を大切にすることであり、遅効的、弱目的な世界を研究していくために、人文学こそふさわしい、というのが今日の結論になります。